

■設計演習特論

[担当教員]

遠藤秀平(教授) 末包伸吾(教授)

槻橋修(准教授) 福岡孝則(特命准教授)

課題 I：大阪市立近代美術館(仮)を構想せよ —都市防災とアートの接点を顕在化する—

■課題主旨

日本国内における美術館はある一定の質と成果を達成していると言えるが、大阪市においてあらたな美術館構想が検討されている。現時点においては、地球環境の変動によるあらたな前提を元に美術館のありかたを構築する必要がある。

このあらたな前提とは、地震や津波、ゲリラ豪雨・極端な高温などさまざまなことである。大阪市立近代美術館(仮)の敷地の前提となっているのは、この極端な環境変動の影響を受けやすい大川沿いに設定されている。

現時点の条件を前提にした上で、近未来に想定される極端な環境変動に対応する美術館を顕在化することがこの課題の目的である。



課題 I；敷地

課題 II：LIVABLE CITY(住みやすい都市)の新しい条件 —神戸三宮都心空間の再定義—

■課題主旨

神戸三宮の都心空間(花時計前から直径 1km 程度の範囲)を再定義する。現在、三宮の都心空間は駅ビル開発、都心再整備、公園マネジメントなど都市空間に大きな変化をもたらすプロジェクトが同時に進行している。

新しい都心三宮がどのような空間になれば良いのか。対象範囲内におけるリサーチを元に具体的な場所での建築プロジェクトを設定し、そのプロジェクトが作り出す新しい社会像が次世代のリバブルシティ(住みやすい都市)を予言するものであることが望ましい。



課題 II；敷地

■「神戸大学 × 天津大学 合同設計展2016」 Kobe University × Tianjin University Architectural Joint Exhibition 2016

テーマ：「未来の都市環境と建築を考える」

会場：デザイン・クリエイティブセンター神戸 KIITO

日時：2016年11月10(木) - 11月13日(日)

公開講評会：2016年11月13日(日)13 ~ 17時

展示内容：設計演習特論 課題作品 (A64)

神戸大学 × 天津大学 合同ワークショップ作品

神戸大学 × モナシュ大学 合同ワークショップ作品

2015年度卒業設計 優秀作品 (A64)

2016年度ランドスケープ設計課題 優秀作品(学部4回生)

天津大学 設計課題 優秀作品

主催：神戸大学建築学教室

共催：天津大学建築学院

後援：JST・さくらサイエンスプラン

神戸市

一般財団法人 神戸すまいまちづくり公社

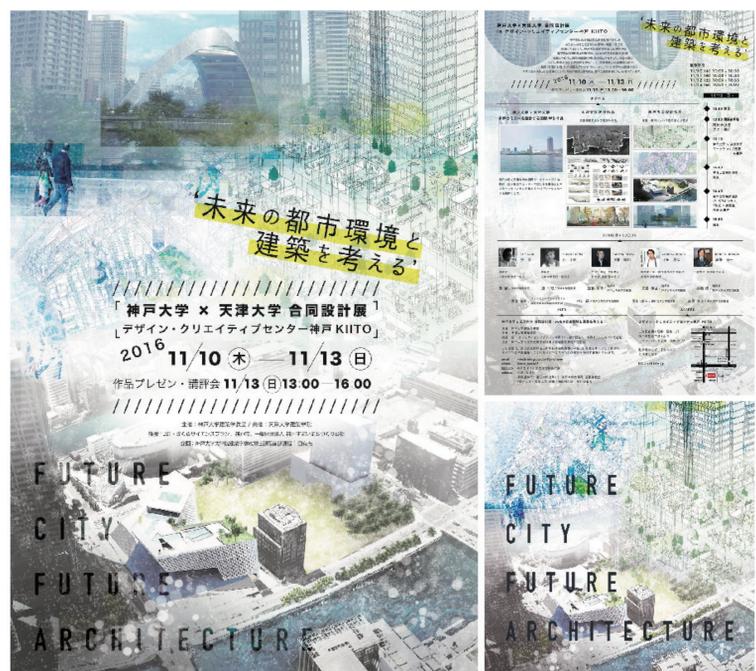
企画：神戸大学大学院建築学専攻博士課程前期課程 1 回有志

池田みさき 黒田知沙 後藤沙羅 小畑皓平 後藤沙羅 坂口大賀

瀬川瑞 田中はつみ 谷大蔵 塚越仁貴 仲川絵理 中村大樹

西村卓馬 馬場智美 三井貴裕 湊大地 宮崎信 森優也

山岡義大 澤江隆志 吉田千恵 北野優真 山本真実 (A64)



▲左・右上；フライヤー(表・裏面)、左下；SNSアイコン画像



▲設計演習特論 課題作品の模型



□公開講評会 11月13日(日)

講評会ゲスト



小幡 剛也 Takeya Obata
竹中工務店 大阪本店
設計部 設計第3部長



廣野 研一 Kenichi Hirono
三菱地所 関西副支店長



平田 晃久 Akihisa Hirata
建築家 / 平田晃久建築設計事務所
京都大学准教授



張 頌 Qi Zhang
建築家
天津大学教授 / 院長



孔 宇航 Yuhang Kong
建築家
天津大学教授 / 副院長

講評会コーディネーター



遠藤 秀平
建築家
神戸大学大学院教授



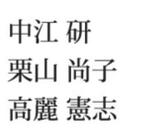
末包 伸吾
建築家
神戸大学大学院教授



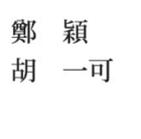
槻橋 修
建築家
神戸大学大学院准教授



福岡 孝則
ランドスケープアーキテクト
神戸大学大学院特命准教授



中江 研 神戸大学大学院准教授
栗山 尚子 神戸大学大学院助教
高麗 憲志 神戸大学技術職員



鄭 穎 天津大学副教授
胡 一可 天津大学副教授



▲公開講評会の様子

■神戸大学 × 天津大学 国際交流レポート

神戸大学建築学科と天津大学建築学院との国際交流は、1980年の学術交流に関する覚書締結により交流が開始され、2014年に覚書を更新いたしました。

2014年度は、天津大学の教員と学生が来神し、神戸・大阪等の関西の建築物の見学と合同設計展を行ないました。2015年度は、神戸大学の教員と学生が天津大学を訪問し、合同設計展が行なわれました。

今年度は、港湾都市における建築・都市設計学に関する国際交流事業として、両大学の学生による神戸の都心ウォーターフロントを敷地とした都市デザインワーク

ショップ、及び、両大学の優秀作品を展示した設計展と講評会を実施できました。

2014年度の覚書の更新以降、天津大学から神戸大学への留学生が着々と増加しており、交流の成果が現れてきました。今後も交流が活発化し、両大学の建築・都市に関する教育と研究の発展に寄与することを祈念いたします。

最後に、今回の交流事業に関わってくださった皆様へ、厚く御礼を申し上げます。

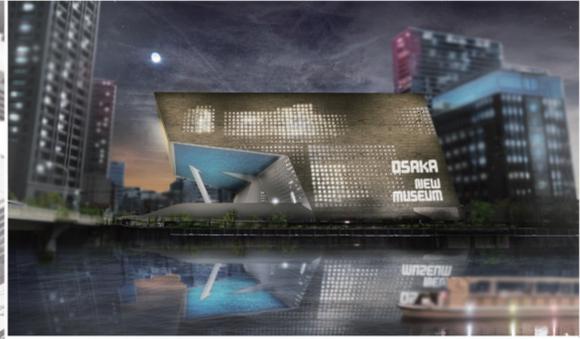
神戸大学大学院工学研究科建築学専攻

2016年度専攻長 阪上公博

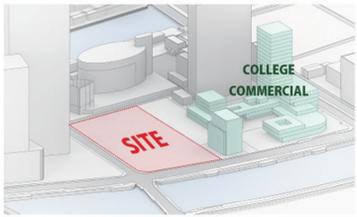


To SOAK+REFLECT+WAVE(Between ART & DISASTER) — 浸る、映る、揺らぐ。 —

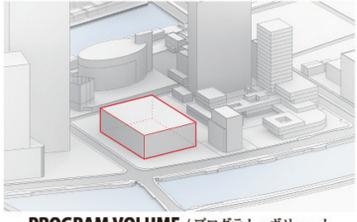
池田みさき 坂口大賀 塚越仁貴 (遠藤研究室) 後藤沙羅 (末包研究室) 森優也 (三輪・栗山研究室)



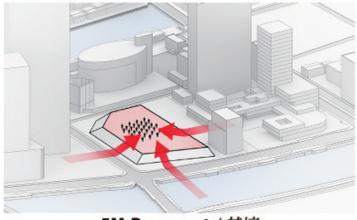
浸水が予測される中之島の敷地において、5Mの高さに新たに創られた日常の賑わいと地面から持ち上げられた建築のヴォリュームによって、人々に非常・災害の意識を与える。都市の美術館としての機能に加え防災拠点として必要な備蓄空間も内包するほか、近隣に計画される商業・大学施設と一帯となって魅力的なリパフフロントを演出する。



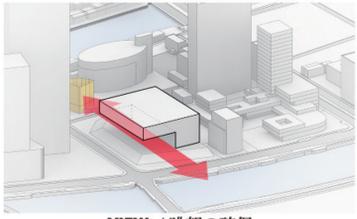
SITE / 敷地



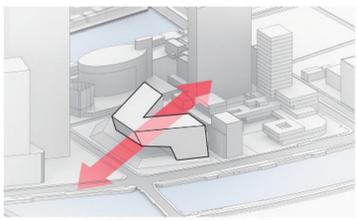
PROGRAM VOLUME / プログラム・ボリューム



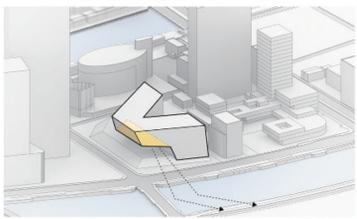
5M-Basement / 基壇



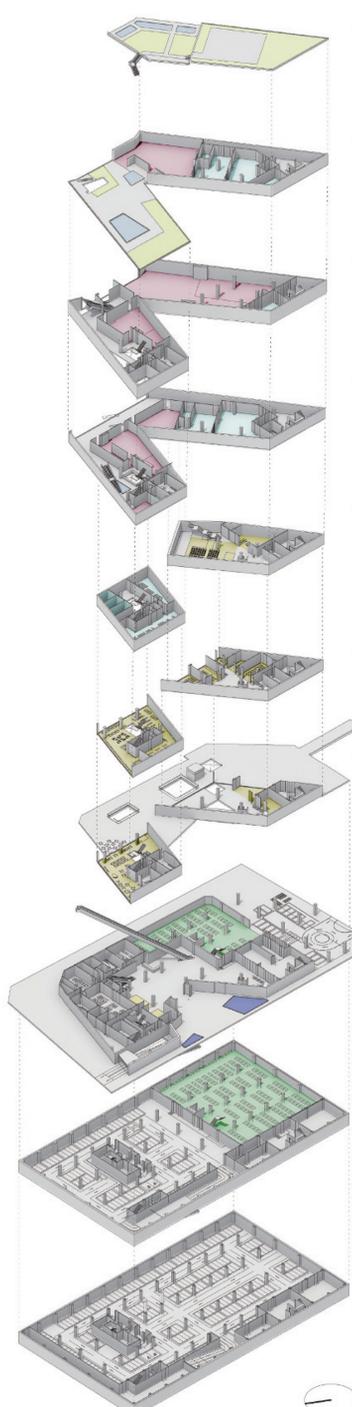
VIEW / 眺望の確保



APPROACH / アプローチ



DISPLAY LIGHTING / 天井映像システム



Roof

GL+31M 7F

- EXHIBITION②(MODERN WESTERN ART) ; 500 m²
- REPOSITORY
- RESEARCH+STUDY ROOM

GL+25M 6F

- EXHIBITION①(JAPANESE ART) ; 490 m²
- SPECIAL EXHIBITION ; 1,200 m²

GL+20M 5F

- EXHIBITION③(CONTEMPORARY ART) ; 550 m²
- EXHIBITION④(LIFE ART) ; 300 m²
- EXHIBITION⑤(THEME EXHIBITION) ; 110 m²
- REPOSITORY

GL+15M 4F

- AUDITORIUM
- MULTI-MEDIA ROOM
- REFERENCE ROOM FOR RESEARCH ; 3 rooms
- CLOSED STACK LIBRARY
- ARCHIVE FOR VALUABLE MATERIALS

GL+10M 3F

- SEMINAR ROOM ; 5 rooms
- CAFETERIA
- LIBRARY

GL+5M 2F

- WORKSHOP ROOM ; 2 rooms
- RESTAURANT

GL+0M 1F

- MUSEUM SHOP
- INFORMATION & TICKET COUNTER
- CLOAKROOM
- OFFICE ROOM
- CONFERENCE ROOM
- DIRECTOR'S ROOM
- SECRETARIAL ROOM
- RECEPTION ROOM
- DISCHARGING & UNPACKING ROOM
- TEMPORARY STOCKROOM
- STOCKPILE WAREHOUSE
- GUARDROOM
- DUSTMAN'S ROOM
- DRESSING ROOM

GL-5M B1

- PARKING LOT ; 80 cars
- MACHINE ROOM
- STOCKPILE WAREHOUSE

GL-10M B2

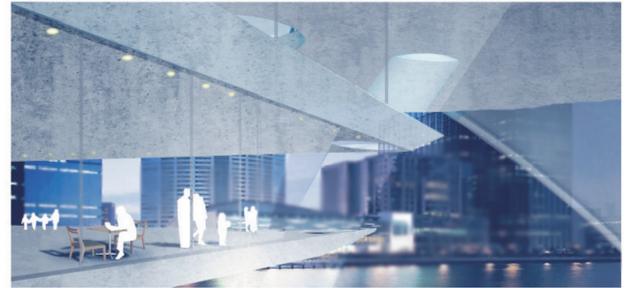
- PARKING LOT ; 192 cars
- MACHINE ROOM

EXPLODED AXONOMETRIC



BETWEEN REAL and HOLLOW ー実と虚の昇華ー

北野優馬 馬場智美 (遠藤研究室) 湊大地 山本真実 (三輪・栗山研究室) 仲川絵理 (末包研究室)



BETWEEN REAL and HOLLOW

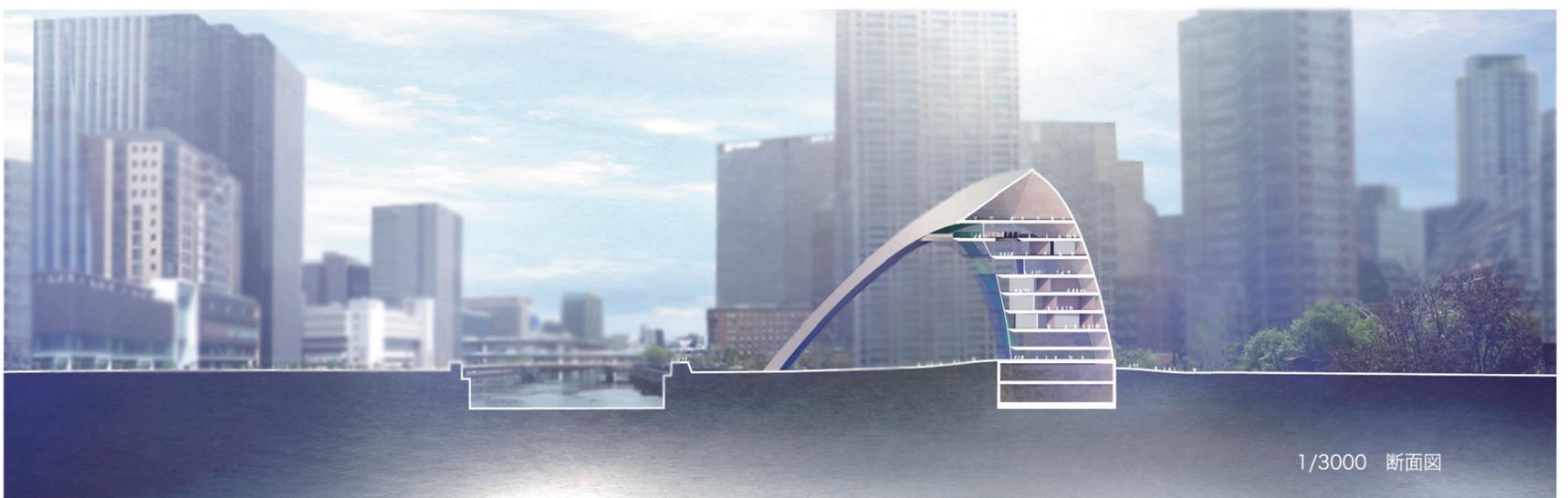
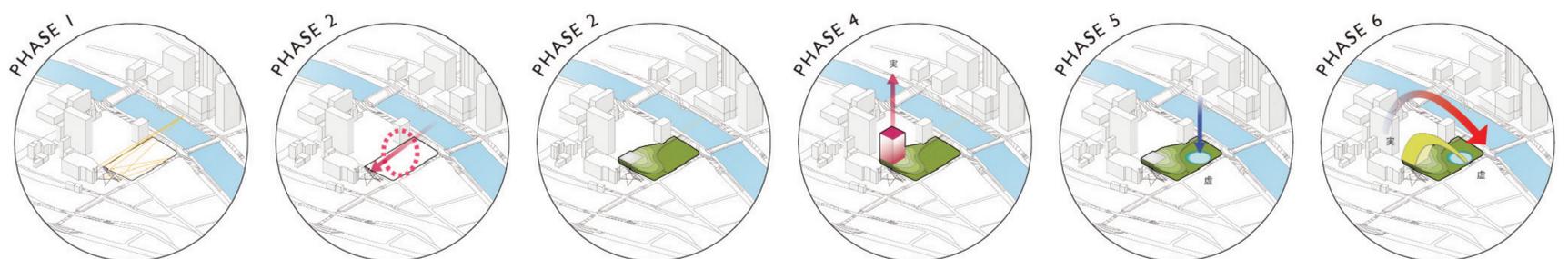
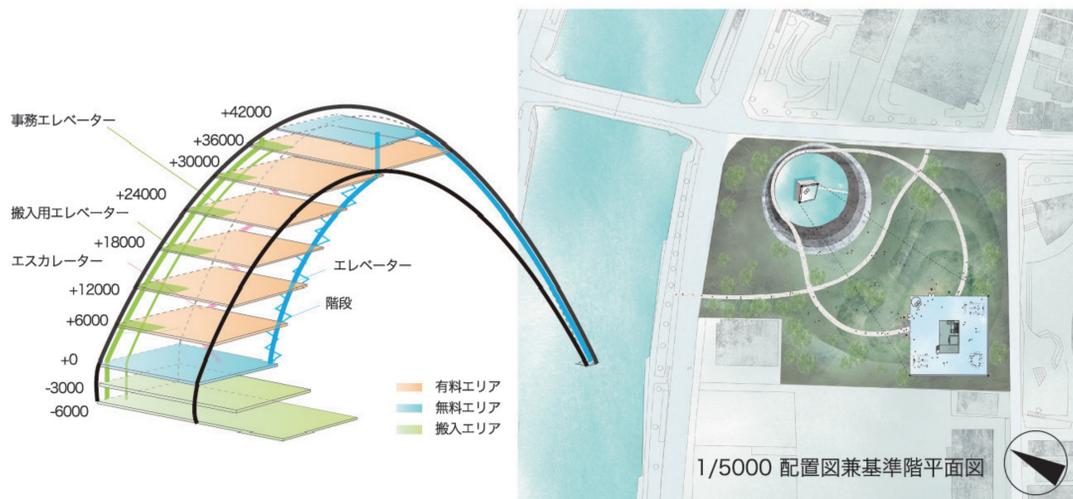
KEY CONCEPT



「虚は実である・実は無である」

実体として存在する美術館に対し、実体として顕在化しない防災意識や災害に対する恐れ。これを言い換えると、美術館を「実」、防災意識を「虚」と定義できる。これらの接点を顕在化させようとする時、「虚を実に・実を虚に」することを考えた。美術館の建物はマッシブな塊として存在するのではなく、周囲の風景を切り取るピクチャウィンドウとして、また、人々が憩う公園として存在する。「実」は「虚」となるのである。川への眺望、水盤へと入っていくエレベーターなど水への意識を様々な形で高めることによって防災意識を顕在化させた。さらに、プログラムとして災害時の避難所となることも想定する。「虚」は「実」になるのである。

この美術館は中之島の新たな風景を作りながら普段顕在化しない防災意識を顕在化させる、新たな美術館の提案である。



CITY DIVERSITY

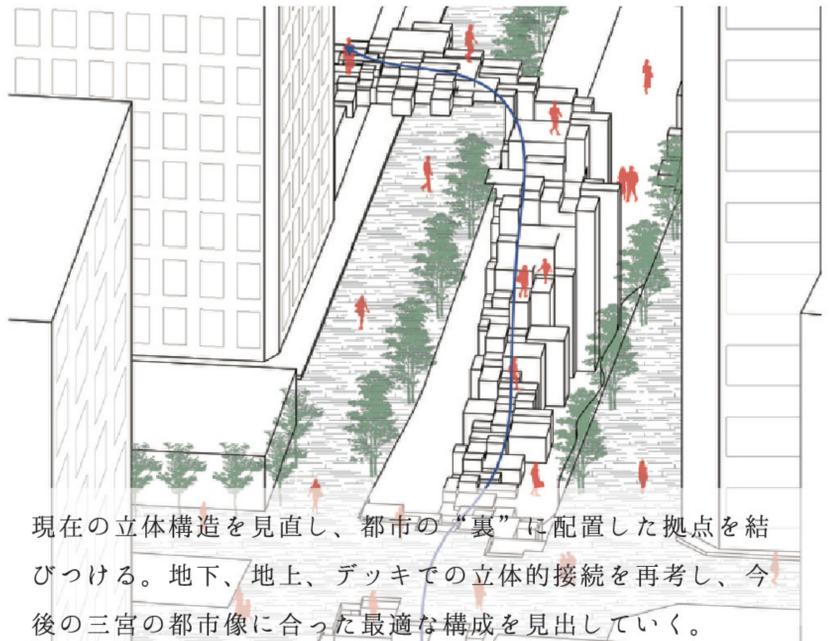
谷大蔵 (遠藤研究室) 小畑皓平 三井貴裕 山岡義大 (槻橋研究室) 瀬川瑞 (中江研究室) 吉田千恵 (三輪・栗山研究室)



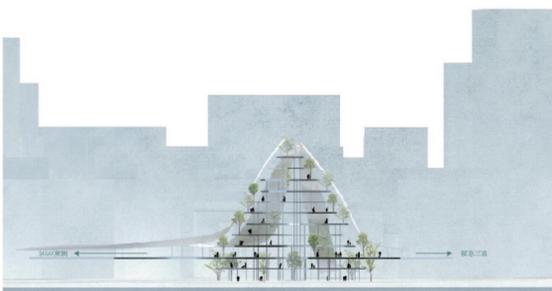
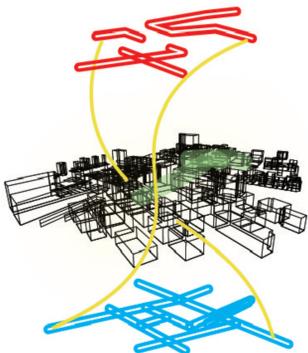
◆ Concept

三宮の都市には、「立体的」な要素が数多く存在している。それは、三宮自体が三層構成を推し進めてきた結果であり、歩く人々に通行の多様な選択肢を与えている。しかし、三宮の都市の通行量には差があり、都市の中に明確な“表”と“裏”の場所が存在している。普段私たちが“都市の裏側”として認識している場所を進んで利用していくことで、生活の中により多様な選択肢が生まれていくのではないだろうか。

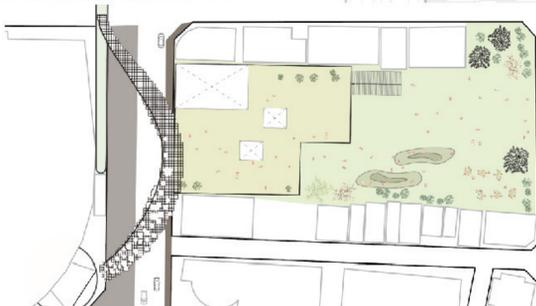
三宮には空間的な特殊性が存在している。北には山、南には海があり、起伏に富んだ地形となっている上に、小さなスケールでは地下、地上、デッキと上下の移動が大きい都市構造となっている。三宮の都市が持つ特性を視覚化する。建物の高さや通行にかかる時間、地下と地上の結節点などを分析し、「立体都市」において重要な拠点となる Base1, Base2, Base3 を形成する。



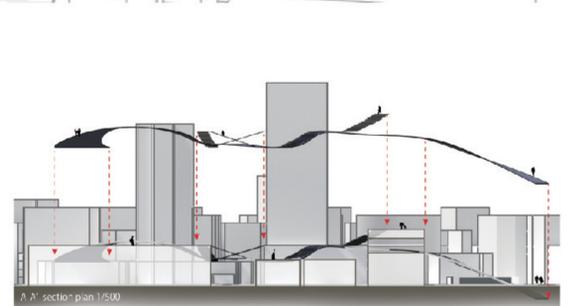
現在の立体構造を見直し、都市の“裏”に配置した拠点を結びつける。地下、地上、デッキでの立体的接続を再考し、今後の三宮の都市像に合った最適な構成を見出していく。



Base1



Base2

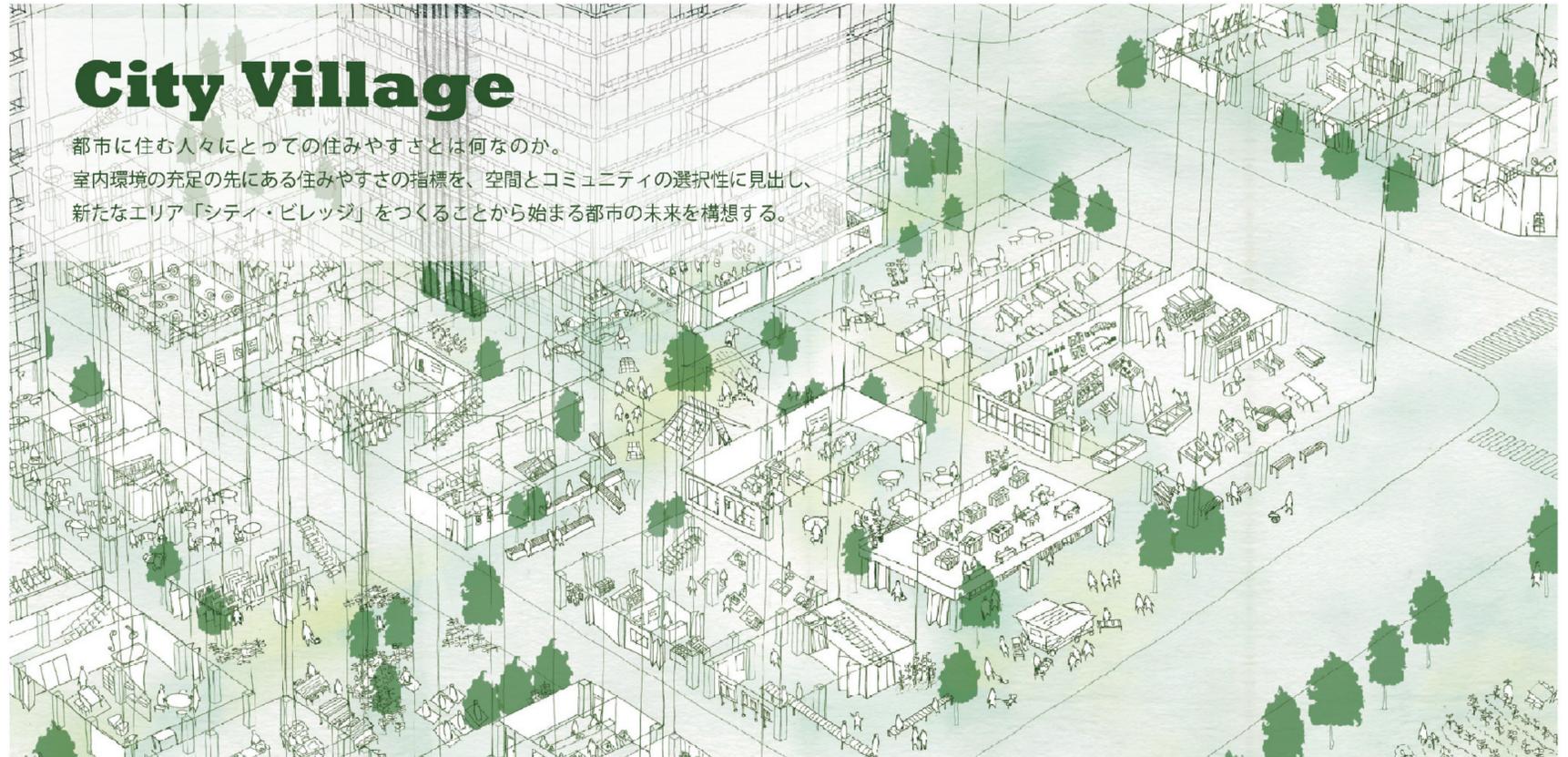


Base3



City Village

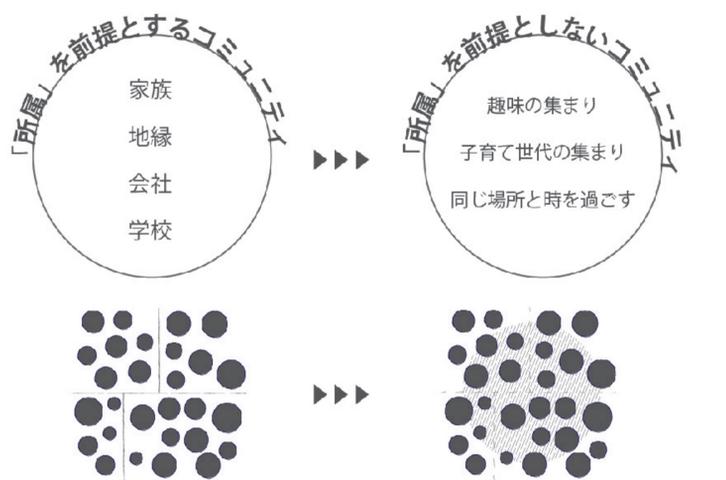
澤江隆志(遠藤研究室) 田中はつみ 西村卓馬(槻橋研究室) 宮崎信(末包研究室) 黒田知沙 中村大樹(三輪・栗山研究室)



City Village

都市に住む人々にとっての住みやすさとは何なのか。
室内環境の充足の先にある住みやすさの指標を、空間とコミュニティの選択性に見出し、
新たなエリア「シティ・ビレッジ」をつくることから始まる都市の未来を構想する。

リバブルシティ=空間とコミュニティの選択性の高い街



まちづくり協議会のナワバリがあり、
さらにその中の点として
生活は独立して存在している。

所属とは切り離された、
自分の居場所が街のなかにある。

